

令和6年度

— テーマ・水について考える —

水の週間記念作文集

第46回 「全日本中学生水の作文コンクール」三重県推薦分

目次

(掲載順は、各賞低学年から、学校名・氏名とも五十音順)

| | | |
|---------------------------|--------------|----------|
| 第46回全日本中学生水の作文コンクール | 優秀賞(国土交通大臣賞) | |
| 第21回琵琶湖・淀川流域水の作文コンクール | 流域賞 | |
| 災害時協力井戸の活用 | 高田中学校 | 一年 渡辺心晴 |
| 第46回全日本中学生水の作文コンクール | 佳作 | |
| 私の周りのため池 | 高田中学校 | 一年 西川優亜 |
| 「当たり前なことに感謝を」 | 高田中学校 | 二年 江崎礼智那 |
| 生き物たちの小さな村、ビオトープ | 高田中学校 | 二年 大西 憩 |
| 「水を育てる」 | 高田中学校 | 二年 富田彩月 |
| 第46回「全日本中学生水の作文コンクール」について | | 11 |

優秀賞（国土交通大臣賞）・流域賞

災害時協力井戸の活用

高田中学校 一年 渡辺 心晴

ある夏の暑い日、近所を散歩していると、公園の一角に「この水は飲めません」と注意書きのある井戸を発見した。重いポンプを何度も上下させて、やっと勢いよくはきだされた水を、私は飲みたい気持ちをぐつと堪えて、手を洗った。するとその水は夏の暑さを忘れてしまうくらい冷たく透き通った気持ちのよい水だった。「この水はどこからきているのだろう」ふと疑問に思った。そこで私は井戸について調べてみた。

井戸は人工的に掘ったもので、地下水をくみ上げる目的で使うものだ。井戸は大昔から人々の生活の助けとなってきた。しかし、昔はたくさんあった井戸も近年使われなくなっているものが多いのだそうだ。そして、私が触れた水はいわゆる地下水で、大地に降り注いだ雨や雪が数年、時には数十万年の時間をかけてろ過され、大地に浸透した貴重な資源だったのだ。あの

日井戸水に感動した私の「井戸水はどこからくるのか」という疑問は大自然とつながっていたのだ。その時、私は「自然ってすごい」と心揺さぶられた。

一月に能登半島地震が起こった。水道管が破壊され、被災者はとても不便な生活を強いられた。飲料水については、ペットボトルなどの備蓄や応急用水などで確保されたが、大量に必要とされる生活用水は十分な供給までに相当な日数がかかった。私たちは生活用水を平均一人当たり一日200〜300リットル使用していて、これはペットボトル500ミリリットルに換算すると約400〜600本分に相当するのだそうだ。私はもし被災したら、たった一日でどこからそれだけの水を得るのだろうと絶句した。

私は今回起きた災害をニュースで目の当たりにし、この先起こると言われている南海トラフ巨大地震に

備え、「生活用水の確保」が必要だという意識が強くなった。そこで井戸のことを思い出した。井戸は発災後の生活に役立つのではないかと考えた。さらに興味を持った私は近所に他の井戸があるのか知りたくなり、探索を始めた。そして隣町に「災害時協力井戸」と掲示してある井戸を発見した。後にこの井戸について調べてみると、井戸の所有者の善意で「災害によって断水が起こったときに誰でも使用してよい」と市役所に登録されている井戸であると知った。さらに、市役所のホームページを見てみると、災害時協力井戸がある場所が表示されているマップも見ることができた。これがあれば、断水が起きた時、みんなが必要な水を確保できるのではないかと思った反面、どれだけの人が災害時協力井戸を知っているのかということを考えると、もつと多くの地域住民がこのことを知るべきなのではないかと思った。せっかく困ったときに使える井戸があるのに、知らない人がいるのはあまりにももったいない。そこで私は、より多くの人に災害時協力井戸の位置や活用法を認知・把握してもらうため、ポスターを制作しマンションや公民館の掲示板に貼り

だしてみてもどうかと思った。ポスターを貼ることで災害時協力井戸の存在を知り、いざという時に備えることができる人も増えるだろう。またポスターだけでなく地域の人にも声をかけることで、日頃からコミュニケーションをとり、災害が起きたときに共助が実現するのではないかと考えた。

私たちは、自然がもたらす災害を避けることはできない。しかし、その自然の恵みを有効に使うことで、発災後の不便な生活にもゆとりが持てるようになるのではないか。だから私はたとえ小さいことだとしても、少しでも多くの人に「災害時協力井戸」の存在を伝えたい。



佳作

私の周りのため池

高田中学校

一年

西川 優亜

私の住んでいる地域には、多くの「ため池」があります。全国には、約二十万個のため池があり、この「片田・野田のため池群」は、全国のため池百選に選ばれています。ため池とは、田んぼや畑に必要な農業用水を貯めるため、人工的に造られた池です。約千三百年以上前、水不足に悩まされた人々が作り始めたものだと言われています。そのため、降水量が少ない瀬戸内地域に多いことが特徴です。このように、お米や野菜などを作るために必要なため池は、私たちの生活に欠かせないものです。その中で、私が注目したのは、ため池が植物と生物の生息の場所だということです。さらに、ため池はそれぞれ構造や水の性質が異なるため、生息している動植物の種類も多様化しています。

私の住んでいる地域にあるため池には、植物ではササユリ、ニガイチゴ、イシモチソウなどがあります。

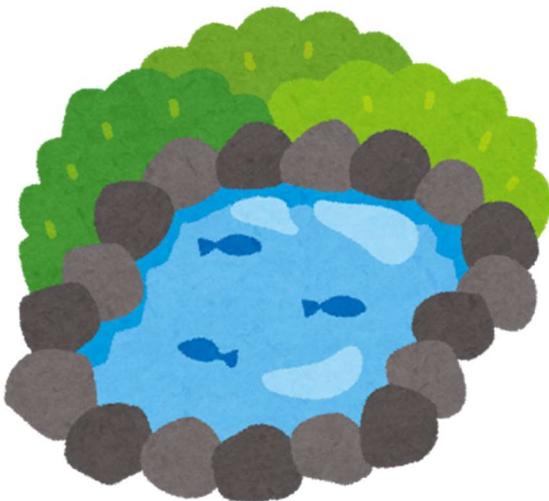
ササユリは、減少しつつある希少な植物で、ニガイチゴは名前とは反対に食べてみると意外と甘かったです。イシモチソウは、虫を食べる食虫植物です。生物では、トンボなどの水生生物をはじめ、カイツブリ、ドジョウなどです。これらは、在来種の小魚を食べることからため池に生息しています。カイツブリは、小さなカモで、水の中に潜って小魚を捕り食べ、水の上に浮いた巣の上で子育てをしています。とてもかわいらしく、とても好きな鳥です。それらの、植物や生物のおかげで、ため池の周りは四季を感じることができ、風景となっており、見るだけで穏やかな気持ちになります。そして、私にとっては故郷の風景そのものであり、旅先から帰ってきたとき、この風景を見るとほっとします。

一方、数年前にはブルーギルやミシシッピアカミミ

ガメなどの外来生物の影響によって、在来種の小魚が減少し、カイツブリなどの姿が見えなくなったことがあったそうです。そのため、ため池の改修工事と池干しを行い、外来生物の駆除を試みたと聞きました。その結果、減少していた在来種の小魚が増加し、しばらく姿を消していたカイツブリなどが戻ってきたそうです。

しかし、近年では、少子高齢化に伴い、ため池の管理や維持をする人が減少していることが大きな問題となっっています。実際、私の通っていた小学校では、父の時代は子供が多く、全校生徒は六百人以上いたそうですが、私のときは百人程度まで減り、少子高齢化は目に見える形になっています。このような現状の中、私の地域では地域の人々が協力し、ため池の管理や維持を目標とした積極的な活動が行われています。例えば、ため池点検パトロールや清掃活動です。小学生の時に参加した、ため池の自然観察会するとき、ため池の周りは雑草が綺麗に刈られ、ごみもなく、整備が行き届いています。加えて、ため池の啓発活動も行われています。私は、啓発活動として行われた自然観察会

への参加をきっかけに、ササユリなどの植物やカイツブリなどの生物に興味を持つことができました。そして、この四季を感じる事ができる美しい風景は、地域の人々のおかげだということが分かりました。これからは、ため池を守っている地域の人々に感謝し、ため池の管理や維持のためのイベントに参加したいと思います。そして、継続的に自然豊かなため池を守るお手伝いをしたいと思います。



佳作

「当たり前前なことに感謝を」

高田 中学校 二年

江崎 礼智那

去年の冬場、我が家の給湯器が故障し、しばらくの間お湯が出ない日が続きました。その間はお風呂のお湯もはれず、シャワーの水しか出ませんでした。そこで私たちは鍋でお湯を沸かし、何度も運んで浴槽に入れ、水で薄めて体を洗うという生活を繰り返しました。それまではボタンを押すだけで自然にお湯が浴槽にはれて、心地の良い温度のお湯につかることができます。それが「当たり前前」の生活でした。急にそのような生活が一変すると、日々の生活がとても不便に感じました。それから数日後、やっとお湯が出るようになり、お風呂にいつもと同じように入ることができるようになりました。そこで私は、普段は何気なく使っているお湯が出なくなるだけで、私たちの生活はとても不便なものになってしまい、いつもの生活がどれだけ幸せで豊かなものなのかを実感しました。

このことがきっかけで、お湯が出るようになった後は、シャワーなどのお湯を一分間出さなければならず、チャイムが鳴るタイマー機能を使うことになりました。すると、いつもの水の使い方は、一分間で十リットルの水がシャワーから出ていました。初めてそれを知った時は、自分は普通の生活で、想像よりもはるかにたくさんのお湯を使っているのだと驚きました。また、朝の洗顔、歯磨きやキッチンでの食器洗いなど、水道からどれだけでも水が出るのが当たり前になってしまっていることを思い知らされました。それから、一分以内に必要最低限の量を使うことを目標にお風呂に入りました。最初は毎日チャイムが鳴っていましたが、最近では一度もチャイムを鳴らすことなくお風呂に入ることができるようになりました。これから、だんだんそれが「当たり前前」になっていけばいい

など思います。

今年の元旦に起こった能登半島地震の被災者の方々の中には、今でも水が使えない方がいることをニュースで知りました。数日間お湯が出なくなるだけでも、こんなに不便な思いをしたのに、水を自由に、そして欲しい時に使えない被災された方々に比べると、どれだけ自分が自由気ままに生きているのかよく分かりました。

現在、世界中では地震だけでなく、いろんな災害が起こっています。また、「水」は災害により不足し、命を脅かしたり、また津波や洪水などで人の命を奪ってしまふ、とても大切でありながら、怖い資源でもあります。ただ、私たち人間が日々の生活の中で、環境破壊につながる行動を控えていくだけでも、水不足や、また逆に大洪水などは食いとめていけるものであると思います。そのために、私は今の自分には何ができるかを日々の生活の中で考え、対策をたてていくのが大切なのではないかと考えます。今回、数日でしたが不自由な生活を経験し、また、自分が使う水の量を可視化したことでようやく気付いたことがあります。そ

れは、私たちは普段、水を必要以上に使ってしまったという場面が多いことです。さらに、その量を「当たり前」だと思い込んでいます。でも、私は一度水が思うように使えない、このような不自由な生活を経験したことにより、とても身近に感じられる水が、どれほど私たちの生活を支えてくれていたかがよく分かりました。これから私は、限りある資源である水の恵みに感謝して、大切に、そして少しずつ使っていきたいです。



生き物たちの小さな村 ビオトープ

高田 中学校 二年 大西 憩

私たちが六年間通っていた小学校には、ビオトープがあります。ビオトープには普段あまり見る機会のない生き物がたくさん住んでいます。例えばオニヤンマ、タイコウチ、トンボの幼虫であるヤゴも見ることができました。小学二年生には、ホタルの成長と、ホタルのえさになるカワニナの視点から食物連鎖を学びました。また、五年生になると、初夏から冬まで「水辺の環境調査」といって、ビオトープの中と学校外での生態系や環境の違いについて観察や実験を通して発見するプログラムがあり、パックテストを使って水質を調べたのがとても印象に残っています。

池にはイトミミズがたくさんいて、それを食べるメダカがいて、メダカを食べるヤゴがいて、そのヤゴがオニヤンマになり、オニヤンマを食べるトンビがいるのです。そんな光景がごく自然にありました。ビオト

ープは、ぎゅっと凝縮された生態系を一か所で観察できる場所でしたが、そこで得た気付きによって、学校の外の場所でも、身近な自然の営みに目を向けるようになりました。特に季節による動物の行動の変化、成長には毎年驚かされます。

ビオトープや学校を囲む山は、勉強に使うためだけにあるわけではなく、いつもみんなの遊び場になっていて、鬼ごっこをしたり隠れ家を作ったりして楽しんでいました。小さなころから、私のそばには当たり前のように森や水辺があったのです。本物を実際に見て触れる教育、つまり実体験を重視した体験学習、特に環境教育に力を入れている小学校だったということ、最近になって知りました。私は今でも、水面のキラキラした水辺があると、靴下を脱いで足を入れたくなります。自然の水に触れることが好きなのです。

人間は水の恩恵をとても便利に活用しています。飲み水だけでなく、体や物を洗ったり農作物を育てたり、発電したりしています。しかし、人間だけのものではないということを認識し、水辺に生きる生き物たちにも思いを巡らせることが、共存し、私たちがこれからも不自由なく水を使用することができ未来への第一歩だと思えます。

私の住む三重県には、自然の水辺に触れられる環境がまだ多くあります。しかし都市部ではどうでしょう。都市部の子どもたちにも「水辺で遊ぶって楽しいんだな」「水辺にはこんなにも沢山の生き物がいるんだ」と感じてもらい、水が人にとって、そして昆虫や動物にとってなくてはならない存在であること、またそんな水の役割についてもたくさん知ってほしいです。そのため、私が自然、生き物に興味をもった理由の大きな一つであるビオトープを学校や公園につくってみるのも良いのではないかと思えます。一人ひとりがまず本物を体で感じ、それを踏まえて学ぶことが、取水や排水をはじめとした水の使い方、生態系に配慮した土地開発、自然保護活動への参加等、必ず環境を守

る行動につながります。よって私は、環境学習は人類が地球で末永く生態系の一員として暮らすための大切な取り組みだと考えました。将来は私が、自然に関するボランティアを通して環境を守ったり、自然や水辺の動植物の営みや魅力をこれからの未来を担う子どもたちに伝えたりできたらいいなと思います。皆さんも、これから生きる人々のために行動を起こしてみませんか。



佳作

「水を育てる」

高田 中学校 二年 富田 彩月

有名な俳優がペットボトル飲料水のCMをしているのをテレビで目にします。その中で地球の大きさと比べて「今すぐに使える水」はほんの小さな雨粒ほどと可視化した映像が流れ、それはインパクトが強く、とても驚きます。「えっ！海対陸って7対3でしょ？」という心の中での叫び声が思わず声に出してしまったこともあり、このCMはとても印象深く私の中に残っています。それで本当のところはどうなのかと気になり、少し調べてみました。すると実際に地球上に存在する水のうち0.01%から0.02%だけがすぐに使える水だという資料を見つけました。CMで見たあの映像が浮かんできて、その時私が感じたのは危機感と恐怖心でした。このままではいけないのに、何をすればいいのかから考えればいいのか、見当もつきませんでした。そんな中、ある企業は「未来の水を今、森から作る。」

という活動をしていると知りました。私には「水をつくる」という考えはありませんでした。それに、環境を守るというと「〇〇を減らす」「××をゼロに」というような、悪いことや良くない行動をなくすという活動が多く、その中で「つくる」という言葉は行動を減らすのではなく、希望ある行動をしよう！という誘いの言葉に聞こえて、何から考えればいいのかも思いつかなかった私に動く力を与え、次のように行動してみようと思いつかせてくれました。

山や森のように木々が多いところに行くと、空気の中に水を感じることがあります。これは、木々の蒸散の作用によってでてくる水蒸気だと考えます。この空気はとても清らかで気持ちが良い、森がつくる空気は澄んでいると教えてくれた出来事です。また森から水を作るということから初めに思い出したのは、森は天

然のダムということ。天然という言葉がついてい
ることで、自然の理のもとでいわば勝手に、人が手を
くらすことなくダムとしての機能を果たすものだと
思い込んでいました。ダムとは水を貯蔵することが働
きの多くであり、「つくる」ということはまた違う印
象を受けます。それにその中から水を安全に取り出す
ことや貯蔵する水の量の変化などを気にしたことは
ありませんでした。水を貯蔵する方法の最もたるもの
は森が豊かであることだと考えられています。それで
は、その蓄えた水を取り出して使うにはどうすればよ
いのでしょうか。日本の技術を使えばそれも簡単なこ
とかもしれません。しかしそれでは人がただ自然から
搾取するだけで、「水をつくる」ということにはつなが
らないと感じました。このことから「水をつくる」こ
れは人の力のみではなく自然と二人三脚でやってい
くことだという考えに至りました。その時思い浮かん
だのは、山の中を歩いているときに感じたあの清々し
い水蒸気です。蒸気はやがて雲をつくり雨になります。
その一部は川の流れとなって私たちを潤します。その
雨は森の木々も育てます。それに、水をつくることは

森を育てること。森が育つには水の循環が必要なのだ
と思いました。そして私のすべきこと、それは水の循
環の歯車の一つとして生活することです。水を使う時
に、「また戻ってきてもらえるように」と思うことが増
えました。これが私のできる「森で水をつくる」お手
伝いです。

母が私を産湯に入れながら、幸せを感じたと聞いた
ことがあります。この幸せがずっと続いてほしいと願
ったと。地球で生きるすべての生命がずっとずっと水
と生きていけますように。この思いを胸に今日も小さ
な行いから続けていきます。



第46回「全日本中学生水の作文コンクール」について

「水の週間」（8月1日～7日）行事の一環として実施された、第46回「全日本中学生水の作文コンクール」の概要は次のとおりです。

1 応募要領

- (1) 課題 「水について考える」（題名は自由）
- (2) 原稿枚数 400字詰原稿用紙4枚以内
- (3) 募集期間 令和6年1月9日～令和6年5月9日
- (4) 版 権 等
 - ・応募作品は自作未発表のものに限る。
 - ・応募作品の返却は行わない。
 - ・入選作品の著作権は主催者に帰属する。

2 地方審査

第46回「全日本中学生水の作文コンクール」審査基準に基づく審査により、優秀作文5編を決定しました。

審査員（4名）

- 三重県中学校国語教育研究会会員
- 三重県環境生活部環境共生局大気・水環境課職員
- 三重県企業庁企業総務課職員
- 三重県地域連携・交通部水資源・地域プロジェクト課職員

3 三重県の応募状況

| 応募学校数 | 応募総数 | 学 年 別 | | |
|-------|-------|-------|-------|-------|
| | | 1 年 生 | 2 年 生 | 3 年 生 |
| 3 校 | 402 名 | 216 編 | 168 編 | 18 編 |

4 中央審査

各都道府県から推薦された優秀作文は、国土交通省におかれる中央審査会で審査され、最優秀賞1編、優秀賞9編、入選30編、佳作（最優秀賞、優秀賞、入選を除く作文）が決定されました。

5 主催・共催

- 主催 水循環政策本部、国土交通省、三重県
- 共催 琵琶湖・淀川流域水の作文コンクール実行委員会

6 その他

優秀作文5編については、「琵琶湖・淀川流域水の作文コンクール実行委員会」（構成団体：三重県、滋賀県、京都府、大阪府、兵庫県、奈良県）でも審査され、流域賞1編が決定されました。

